

1. 研究の背景と目的： 近年、私たちを取り巻く環境はめざましく変化し、様々な生き方や家族のあり方が社会的に認められるようになってきた。食生活や住まい方についての認識も多様化し、台所や食事室のあり方にも今までとは違った機能が求められ、家事観や食事観などにも相違が見られるのではないかと考えられる。本研究では女性の年代別にそれらと家族の形態やライフサイクルとの関連をとらえ、21世紀に向けてこれからの台所像を探ろうとするものである。

2. 研究の概要： 1999年10月に、本学生活科学部卒業生4373人に、食生活の外部化、調理や食事に要する時間、食事観、食品の安全性、食生活に関わる環境問題等についてアンケート調査を実施した。1723通を回収し、回収率は39.4%であった。その結果を女性の年齢を20代から70代の6段階に分けて分析した。

3. 結果及び考察： 年齢が高いほど外食やデリバリーの利用頻度が少なくなっている。また食品を選ぶ際には、発ガン性物質や保存剤等に気をつけ、安全性に配慮しており、食事時間は長く、特に調理の時間がかかっていた。環境問題意識については、年齢が高いほど生ゴミの処理や油を下水に流さないなどの意識が高く、逆に年齢の低いほうはペーパー類を安易に使用していることがわかった。しかし、いずれの世代も食生活と団らんの関係については、団らんのあり方が多様化し、食事の重要性は家族によって違ったものになるという意見が主流を占めていた。本研究は卒論生の川田菜穂子氏との共同研究である事をここに記し、感謝の意を表します。